



中国の文化Ⅸ第2回

殷代

漢字の誕生

文字は人類がことばを記録する  
ために発明した最初の装置で  
ある。

文字の誕生によって人類は時  
間や空間を越えて、ことばを伝  
えることを可能にした。

中国で発明され、やがて東ア  
ジアの共通文字となった漢字は  
いつごろ誕生したのであるうか。

今回は中国最古の漢字である  
甲骨文字と、その発見によって  
実在が確認された殷王朝、さら  
にその研究に従事した研究者た  
ちのドラマについて紹介する。



マテオ・リッチ（一五五二〜一六一〇）

イエズス会士。イタリア生。ローマ学院で数学、天文学を学んだ後、東方伝道を志し、一五八二年に澳門に到着。優れた中国語力と科学知識によって中国の人々の尊敬を集め、一六〇一年には北京で明の万曆帝に拝謁し、北京在住と中国全土におけるキリスト教布教の許可を得た。



この文字を使う国民は、たとえ非常に言語の異なつた国民の間でも、みな文字や書物を介して相互に理解できるといふことです。西洋の文字ではこうは行きません。それだから日本とシヤムと中国は、それぞれ別の大国で、言葉もまたまったく違っているのですが、相互理解が非常によく行なわれ、同じ文字が各国で使われているようです。

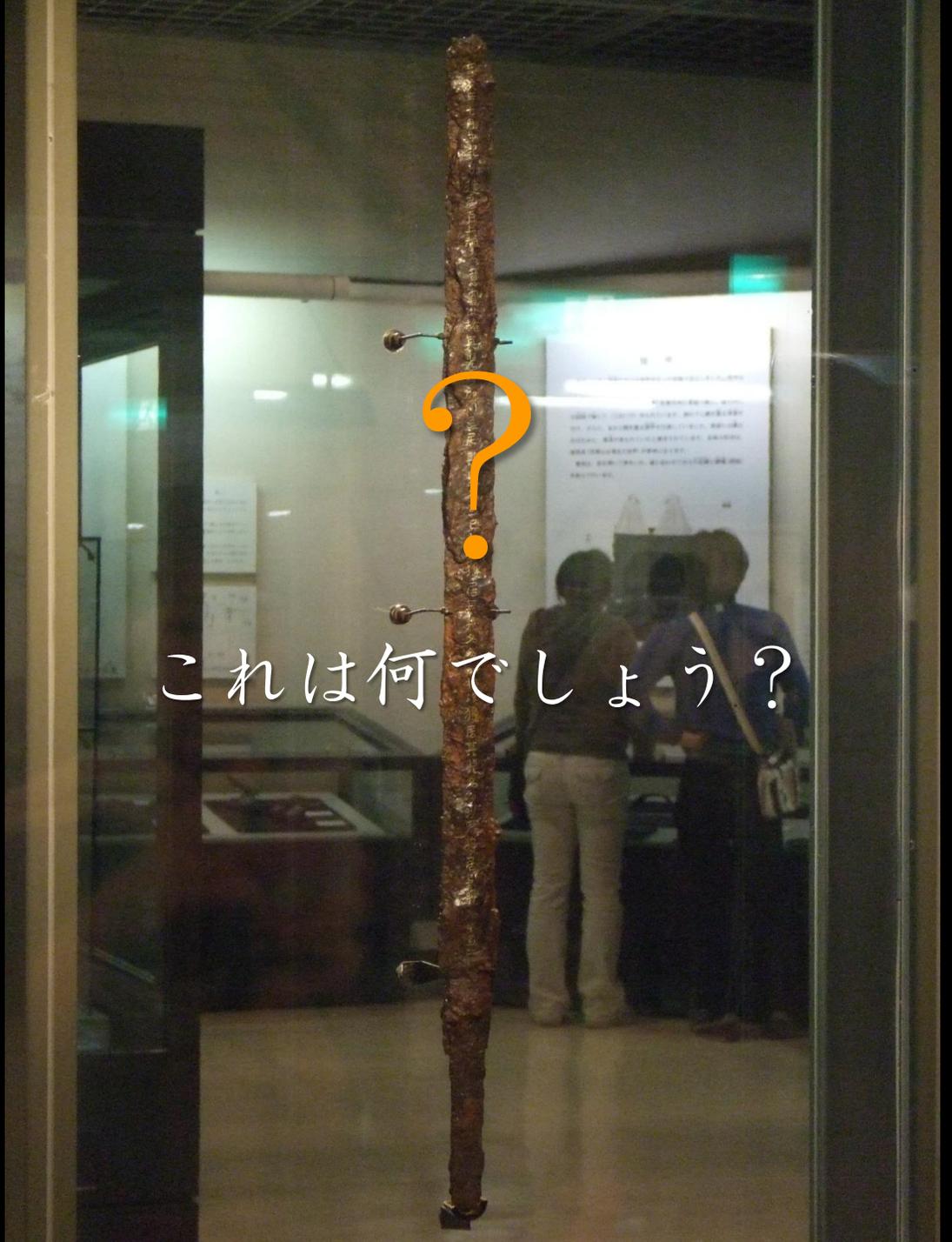
マテオ・リツチ通信一五八三年二月十三日

平川祐弘『マテオ・リツチ伝1』

(東洋文庫一四一、平凡社、一九六九年)



これは何でしょう？



## 金錯銘鉄剣

一九六八年に埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土した全長七十三・五センチの鉄剣。十年後、保存処理の過程で表に五七字、裏に五八字の計一一五字の銘文があることが分かった。銘文には「辛亥年（四七一？）七月中記す」とあり、大和朝廷の雄略天皇とされる「獲加多支鹵（ワカタケル）大王」の名が刻まれている。

金錯銘鉄剣（埼玉県行田市）



ワカタケル(雄略天皇)時代の文化交流

大長谷の若建(ワカタケル)命、長谷朝倉の宮に坐し、天下を治む……此の時、吳(中国南朝宋)の人、参り渡り来りぬ。其の吳の人を吳原に安置す。故に其の地を号して「吳原」(現奈良県高市郡明日香村栗原)と謂う。

雄略

自牟之家隱身役於馬耳牛耳也

大長谷若建命坐長谷朝倉宮治天下

也天皇娶大日下王之妹若日下部王

子又娶都夫良意富妻之女韓比賣生

御子白髮命次妹若帶比賣命柱二故為

白髮太子之御名代定白髮部又定長

谷部舍人又定河瀬舍人也此時吳人

参渡来其吳人安置於吳原故号其地

謂吳原也初太后坐日下之時自日下

之直越道幸行河内尔登山上望國內

者有上坚奠作令屋之家天皇令問其

家云其上坚奠作舍者誰家答曰志幾

之大縣主家尔天皇詔者奴乎己家似

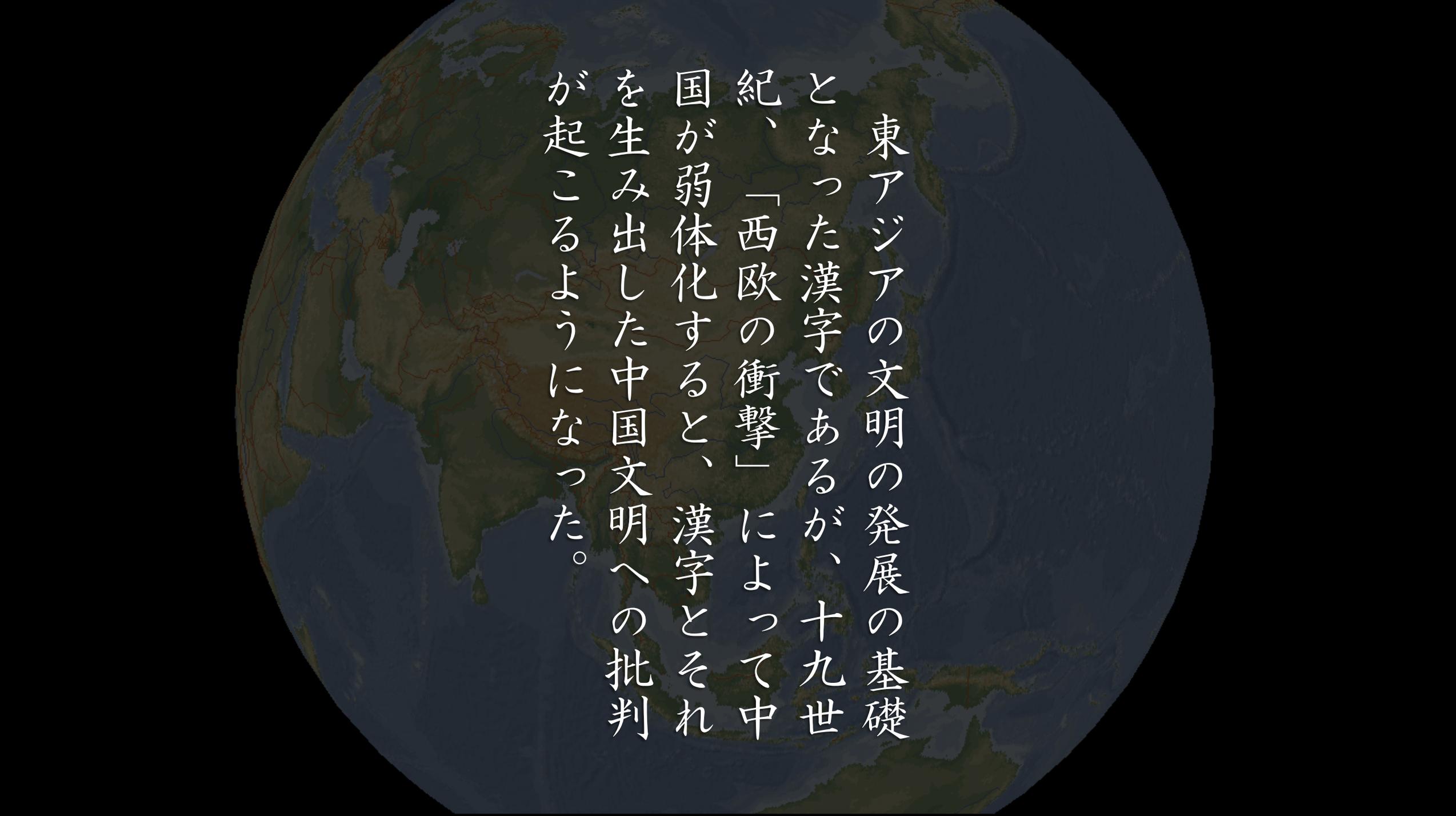
天皇之御舍而造即遣人令燒其家之

## 漢字の誕生

漢字の発明は、中華文明を誕生させたばかりでなく、言語を異にする東アジアの諸民族に漢語という共通語 (Lingua Franca) を与え、それを基盤とする文明圏の成立と高度な精神的交流を可能にした。

金錯銘鉄剣 (埼玉県行田市)





東アジアの文明の発展の基礎  
となった漢字であるが、十九世  
紀、「西欧の衝撃」によって中  
国が弱体化すると、漢字とそれ  
を生み出した中国文明への批判  
が起こるようになった。

## 西洋の衝撃(Western Impact)と漢字

明から清へと四百年あまりにわたって続いた海禁政策によって、中国は政治、科学、教育、軍事などの面でヨーロッパに大きく後れをとることになった。

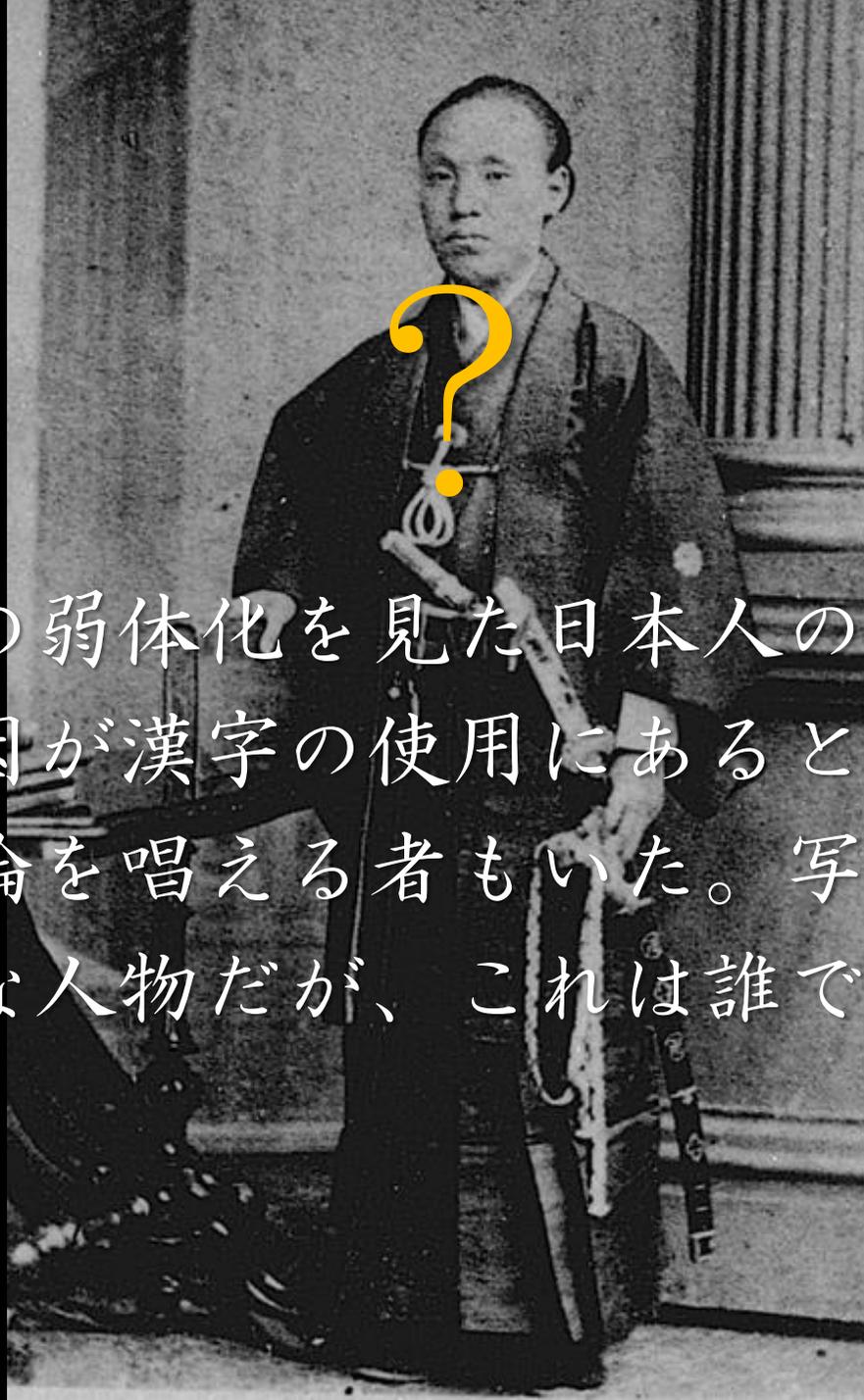
一八四〇年、イギリスの麻薬密輸に端を發した第一次アヘン戦争は、清朝側の敗北に終わり、東アジアの国々に大きな衝撃を与えた。



Steam ship Nemesis destroying the Chinese war junks in Anson's Bay

(虎門安森灣) 7 January 1841

National Maritime Museum, Greenwich, London



中国の弱体化を見た日本人の中には、その原因が漢字の使用にあるとして、漢字廃止論を唱える者もいた。写真はその代表的な人物だが、これは誰でしょう？



## 前島密(一八三五〜一九一九)

新潟の豪農の家に生まれる。江戸で洋学を修め、幕臣前島家を継ぐ。一八六六年、教育普及のため、幕府に「漢字御廃止之儀」を献策した。維新後は明治政府に出仕し、イギリス留学後、日本の近代的郵便制度の創設に尽力。政変により一時政府を去るが、明治二一年(一八八八)、逓信次官として官界に復帰、電話事業の創始に当たった。



## 漢字廃止論

國家の大本は國民の教育にして、其教育は士民を論ぜず國民に普(あまね)からしめ、之を普からしめんには成る可く簡易なる文字文章を用ひざる可らず。……然らば御國に於ても西洋諸國の如く音符字(假名字)を用ひて教育を布かれ、漢字は用ひられず、終には日常公私の文に漢字の用を御廢止相成候様(あいなりそうろうやう)にと奉存候(ぞんじたてまつりそうろう)。

## 脱亜論

我日本の國土は亞細亞の東邊に在りと雖も其國民の精神は既に亞細亞の固陋を脱して西洋の文明に移りたり。然るに爰(ここ)に不幸なるは近隣に國あり、一を支那と云ひ、一を朝鮮と云ふ。此二國の者共は一身に就き又一國に關して改進の道を知らず、交通至便の世の中に文明の事物を聞見せざるに非されども耳目の聞きたるを以て心を動かすに足らざるを其

### 脱亜論

明治維新によって近代化を実現

した日本では、アジアの国々と袂

をわかち、西欧列強と行動をとも

にすべきとの議論が起こる。(一八八五)



## 脱亜論

我日本の國土は亞細亞の東邊に在り。雖も其國民の精神は既に亞細亞の固陋を脱して西洋の文明に移りたり。然るに爰に不幸なるは近隣に國あり、一を支那と云ひ、一を朝鮮と云ふ。此二國の者共は一身に就き又一國に關して改進の道を知らず、交通至便の世の中に文明の事物を聞見せざるに非されども耳目の聞見は以て心を動かすに足らずして其古風舊慣に戀々するの情は百千年の古に異ならず。

福澤諭吉「脱亜論」(明治十八年(一八八五))



## 脱亜論

左れば今日の謀を爲すに我國は隣國の開明を待て共に亞細亞を興すの猶豫ある可らず。寧ろ其伍を脱して西洋の文明圏と進退を共にし、其支那・朝鮮に接するの法も隣國なるが故にとて特別の會釋に及ばず。正に西洋人が之に接するの風に從て處分す可きのみ。

惡友を親しむ者は共に惡名を免かる可らず。我れは心に於て亞細亞東方の惡友を謝絶するものなり。

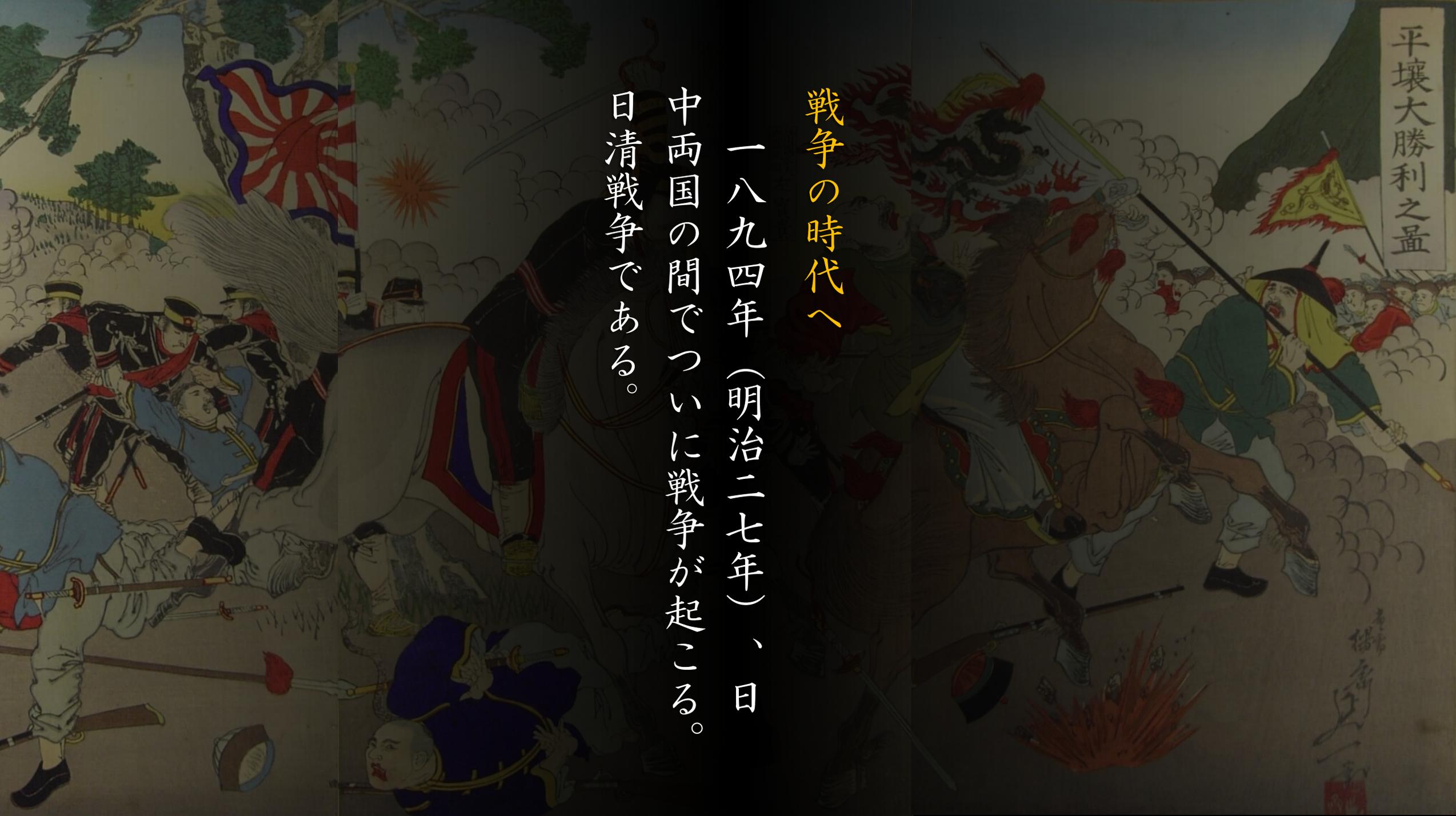
福澤諭吉「脱亜論」(明治十八年(一八八五))



平壤大勝利之盃

## 戦争の時代へ

一八九四年（明治二七年）、日  
中両国の間でついに戦争が起こる。  
日清戦争である。





大島少將

左寶軍領

平壤大勝利之圖

「平壤大勝利の図5年」  
(日清戦争錦絵、野田市立興風図書館蔵)



海軍  
永年繪

「帝国艦隊、威海衛に於いて敵艦を撃沈す」(1895年)  
(日清戦争錦絵、野田市立興風図書館蔵)



「講和談判の図」

(日清戦争錦絵、野田市立興風図書館蔵)

## 中国古代史批判

「堯舜禹の三帝をはじめ、夏后氏及び殷代の歴史として今日記録に伝えられたものは、悉く假作の物語であって、之を實際の歴史と認めることは出来ない」

『アジア蔑視の広がり』(全集八卷所収)

日清戦争に勝利した日本は、さらにアジアへの蔑視を強め、その傾向はやがて学問の世界へも広がっていった。

## 中国古代史批判

「堯舜禹の三帝をはじめ、夏后氏及び殷代の歴史として今日記録に伝えられたものは、悉く假作の物語であって、之を實際の歴史と認めることは出来ない」

白鳥庫吉『支那古代史の批判』（全集八卷所収）



白鳥庫吉 (1865~19



B.C.1600  
1500  
1400  
1300  
1200  
1100  
1000  
900  
800  
700  
600  
500  
400  
300  
200  
100  
+  
AD100  
200  
300  
400  
500  
600  
700  
800  
900  
1000  
1100  
1200  
1300  
1400  
1500  
1600  
1700  
1800  
1900  
2000

三皇五帝

夏

# 殷王朝以前の歴史を否定

殷

周

春秋戦国時代

秦

漢

魏

蜀

吳

晋

南北朝時代

隋

唐

五代十国

遼

北宋

金

南宋

元

明

清

中華民国

中華人民共和國



白鳥庫吉 (1865~1942)

## 中国古代史擁護

こうした中、中国の古典を擁護し、そこに記された古代王朝の存在を証明しようとした日本人がいた。林泰輔である。



林泰輔 (1854~1922)

# 講義内容

## 第一節 殷王朝は実在したのか

～中国古代史をめぐる漢学者と東洋学者の論争

## 第二節 甲骨資料の発見

～殷王朝の実在を証明した古代文字

## 第三節 殷墟の発掘

～現代によみがえった古代王朝



## 第一節

# 殷王朝は実在したのか

中国古代史をめぐる  
漢学者と東洋学者の論争

白鳥庫吉 (1865~1942)



林泰輔 (1854~1922)



林泰輔 (1854~1922)

林泰輔 (一八五四〜一九二二)

漢学者。安政元年(一八五四年)、  
千葉県生。郷里の漢学者・並木栗水  
から清朝の考証学を学び、明治二〇  
年(一八八七)、東京大学古典講習科  
漢書科を卒業した。

明治四一年(一九〇八)、東京高等  
師範学校・教授となり、大正一一年  
(一九二二)、同校在任中に没。



林泰輔 (1854~1922)

酒を飲まず、烟草を吸はず、碁も打たず、将棋も指さず、書画骨董も好む所なく、学校の講席に臨む外は、終日端座して机に對ひ、書を読み筆を執りて余念なかりしは、亡友林浩卿博士の日々の生活なり。

瀧川亀太郎「『支那上代之研究』序」

【解説】

瀧川亀太郎は『史記会注校証』の著者。林とは学生時代に寢食を共にした学友だった。

漢學者たちが学んだ孔子の教え

子曰、述而不作、信而好古

私は事実を伝えるだけで、勝手な創作などはしない。むかしの人が伝えたものを信じ、それを大切にしているだけだ

(論語述而第七)

論語註疏解經卷第七

魏何晏集解

宋邢昺疏

述而第七

正義曰此篇皆明孔子之志行也以前篇論賢人君子及仁者之德行成德有

漸故以聖人次之

子曰述而不作信而好古竊比於我老彭包曰老彭

殷賢大夫好述古事我若老彭但述之耳

義曰此章記仲尼著述之謙也作者之謂聖述者之謂明老彭殷賢大夫也老彭於時但述修先王之道而不自制作篤信而好古事孔子言今我亦爾故云此老彭猶不敢顯言故云竊包曰至之耳正義曰

白鳥庫吉(一八六五～一九四二)

東洋学者。慶応元年(一八六五年)、  
千葉県茂原市に生まれる。

東京帝国大学文学部史学科で、  
当時二十代だったリースからヨー  
ロッパの科学的歴史研究法を学ぶ。

卒業後、学習院教授、文科大学教  
授、東宮御用掛などを歴任。京都帝  
国大学の東洋学者・内藤湖南ととも  
に「東の白鳥庫吉、西の内藤湖南」  
と並び称された。



白鳥庫吉(1865～1942)



Ludwig Riess (一八六一〜一九二八)

ルートヴィヒ・リース。一八八〇年、ベルリン大学に入学し、史料の科学的分析による近代科学としての歴史学を確立したランケ(Leopold von Ranke 一七九五〜一八八六)に学ぶ。

一八八七年(明治二〇年)、東京帝国大学に講師として招かれ、一九〇二年(明治三五年)まで一五年間、ヨーロッパの科学的歴史研究法を伝えた。

## 中国古代史批判

「堯舜禹の三帝をはじめ、夏后氏及び殷代の歴史として今日記録に伝えられたものは、悉く假作の物語であって、之を實際の歴史と認めることは出来ない」

白鳥庫吉『支那古代史の批判』（全集八卷所収）



白鳥庫吉 (1865～1942)



B.C.1600  
1500  
1400  
1300  
1200  
1100  
1000  
900  
800  
700  
600  
500  
400  
300  
200  
100  
+  
AD100  
200  
300  
400  
500  
600  
700  
800  
900  
1000  
1100  
1200  
1300  
1400  
1500  
1600  
1700  
1800  
1900  
2000

三皇五帝

夏

# 殷王朝以前の歴史を否定

殷

周

春秋戦国時代

秦

漢

魏

蜀

呉

晋

南北朝時代

隋

唐

五代十国

遼

北宋

金

南宋

元

明

清

中華民国

中華人民共和国



白鳥庫吉 (1865~1942)



林泰輔 (1854~1922)

堯舜禹抹殺論論争



林泰輔 (1854~1922)

周代以前に於ていかなる時代の存在せしかといふに、唐といひ虞といひ夏といひ殷といふものありしことは、尚書その他左傳、史記等の諸書の傳ふる所なり。而してこの説の然否を確かめんとせば、書籍以外の實物に就て研究するより善きはなし。

林泰輔 「堯舜禹抹殺論に就て」



林泰輔 (1854~1922)

たゞ周代以前の研究材料となすべ  
きものは従來世に知られたるもの、  
僅に古銅器の類に過ぎざれども、そ  
の古銅器にして、これまで殷器と稱  
せしもの、果して殷器なりや否や、  
他に正確なる傍證のあらざる限りは、  
容易に信じ難きものなり。

林泰輔 「堯舜禹抹殺論に就て」

## 大盂鼎（紀元前一〇〇〇年頃）

清の道光初年（一八二一〜三〇）、  
陝西省郿県礼村（岐山の南麓、周原の  
地）で発見された。

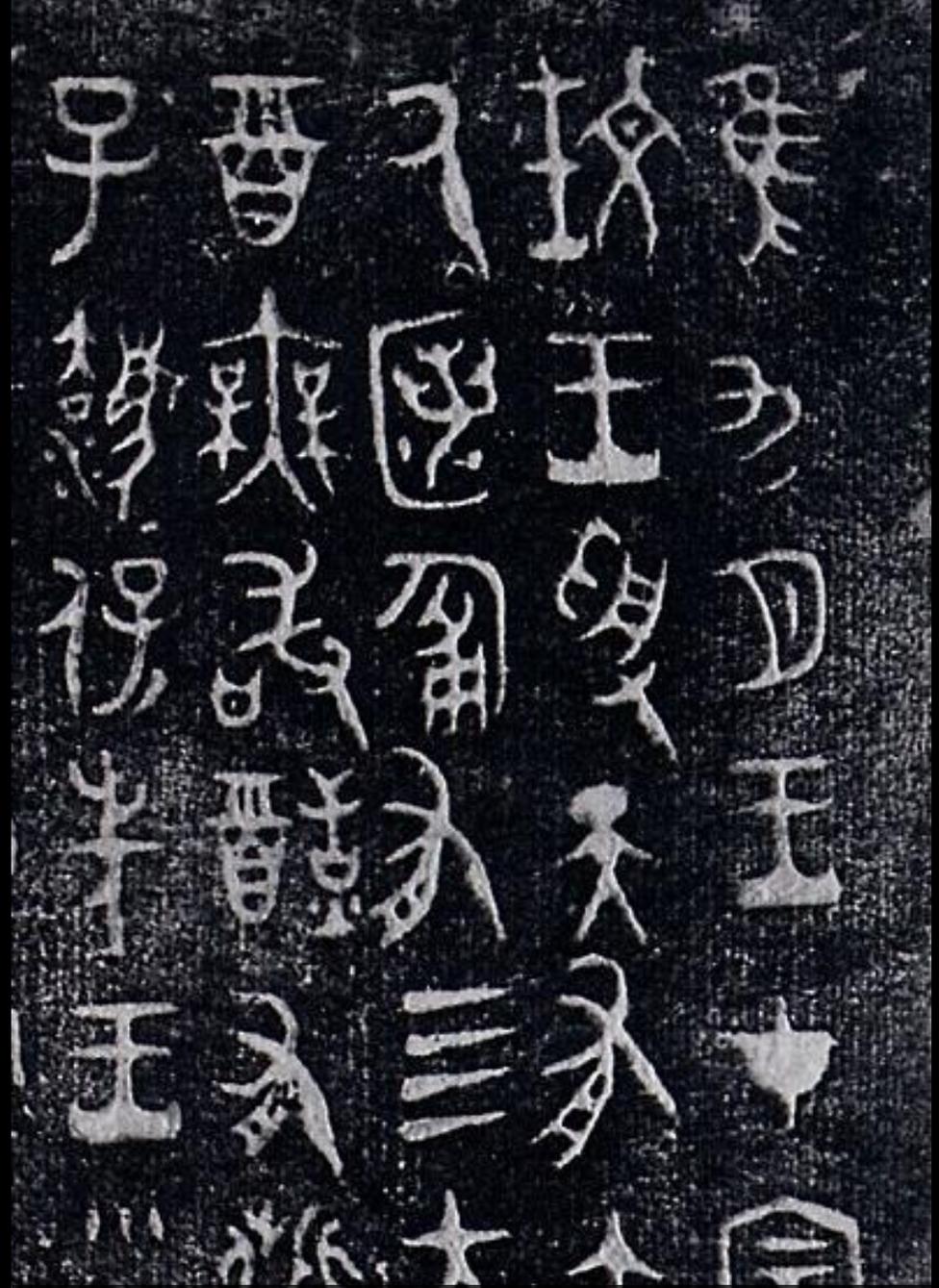
銘文にある「二十三年祀」という  
紀年と内容から、周の康王（殷を滅ぼ  
した武王の孫）の二三年（紀元前一〇〇〇  
年ごろ）に制作されたものと考えられ  
ている。



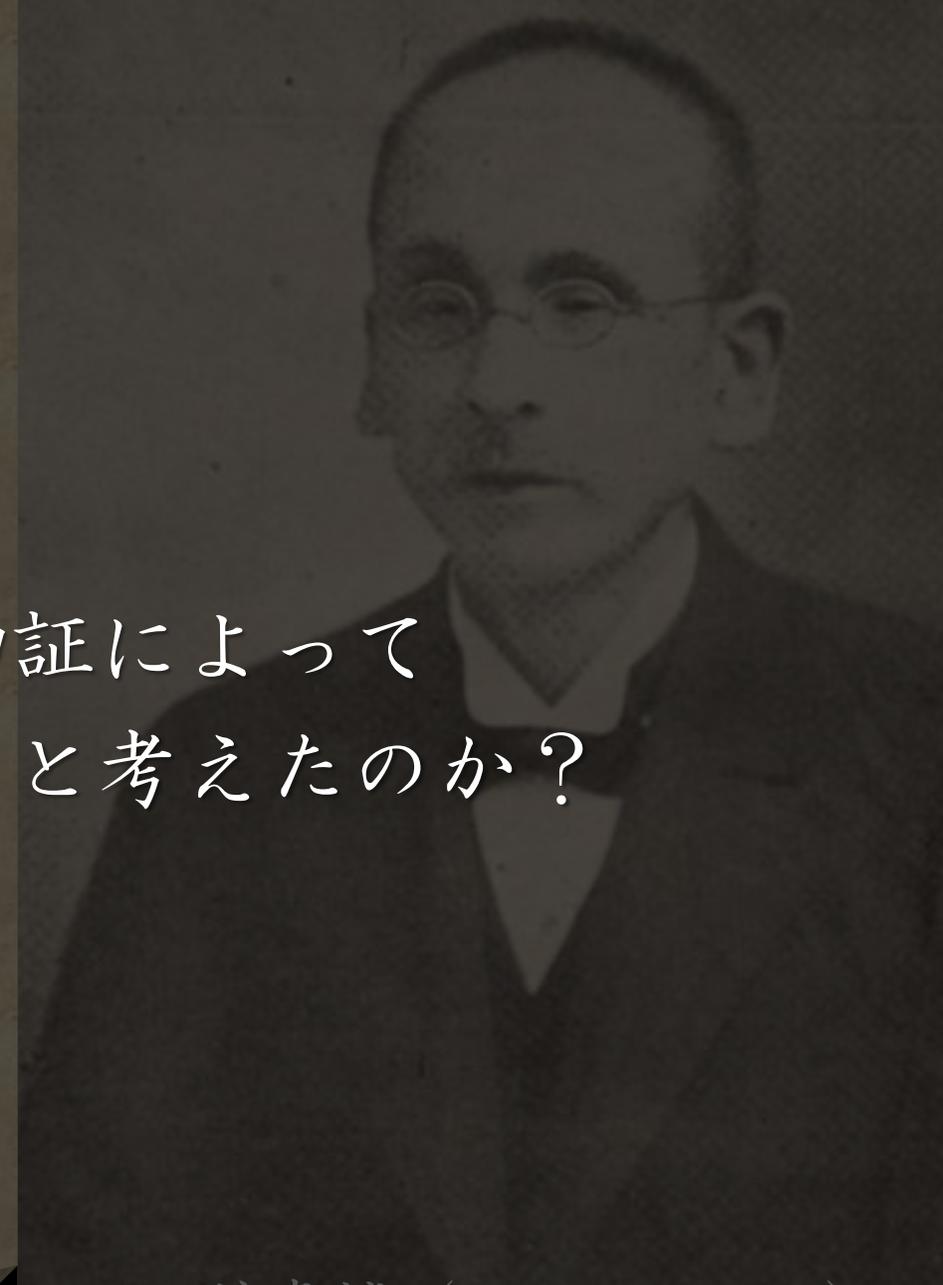
大盂鼎（周代B.C.1000頃）



大盂鼎 (周代B.C.1000頃)



大盂鼎の銘文 (拓本)



ような物証によって  
明しようと考えたのか？

たゞ周代以前の研究材料となすべ  
きものは従来世に知られたるもの、  
僅に古銅器の類に過ぎざれども、そ  
の古銅器にして、**林泰輔はどの朝の**  
せしもの、果して殷器なりや否や、  
他に正確なる傍證の**主**あらざる限りは、  
容易に信じ難きもの**殷**り。

林泰輔 「堯舜禹抹殺論に就て」

林泰輔 (1854~1922)



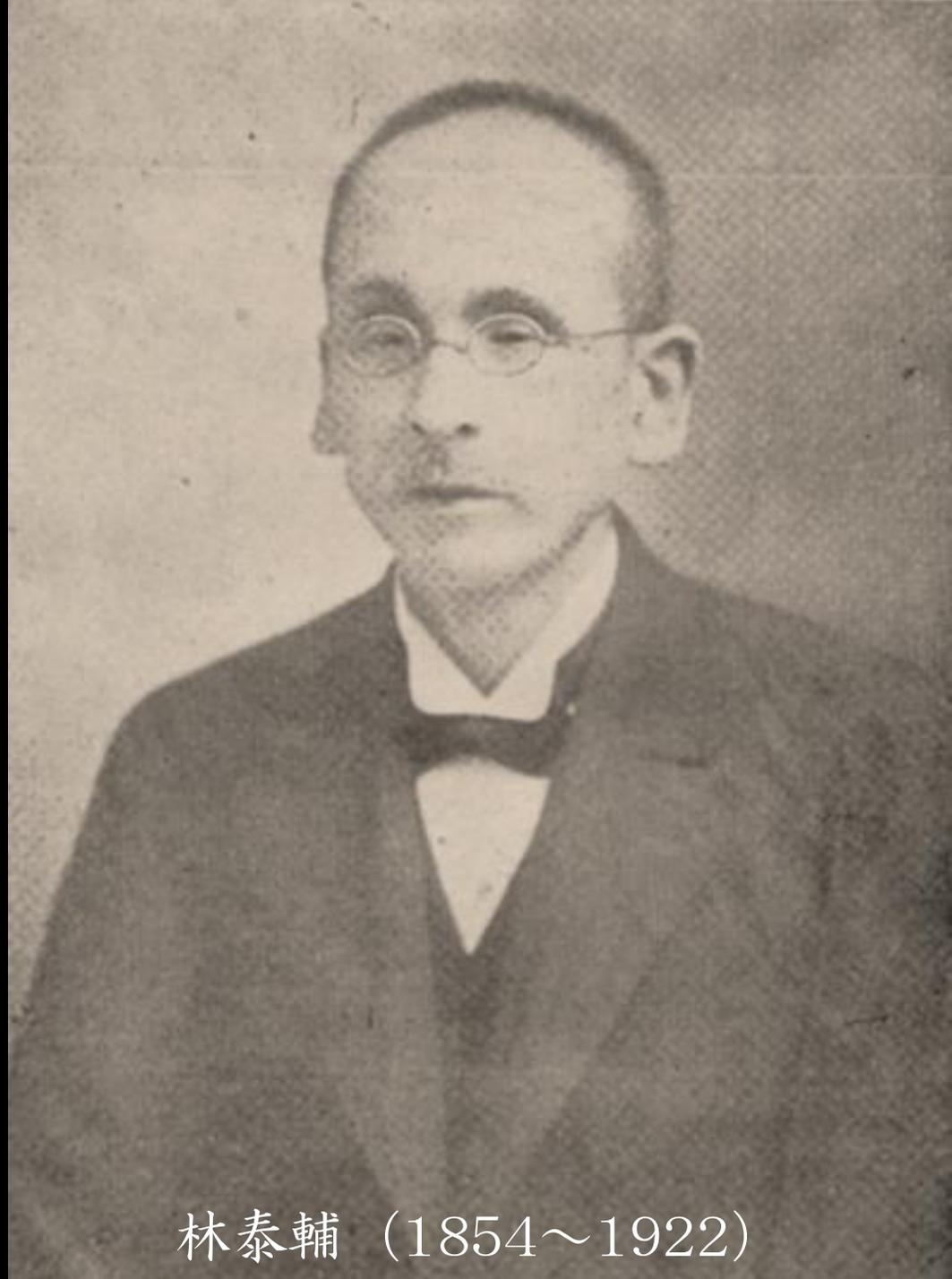
林泰輔 (1854~1922)

然るに近來、古銅器以外に於て有力なる證據の發見せらるゝものあり。そは清の光緒二十五年（明治三十二年、一八八九年）河南省にて發見せられたる龜甲獸骨に文字を彫刻せしもの是なり。

林泰輔 「堯舜禹抹殺論に就て」



亀甲に刻まれた甲骨文字



林泰輔 (1854~1922)



## 第二節

# 甲骨文字の発見

殷王朝の存在を証明した  
中国最古の文字

## 甲骨文字の発見

白鳥庫吉と林泰輔が中国古代史の  
実在をめぐって激しい論争を始める  
十年ほど前、中国では歴史学者たち  
の認識を変える画期的な事件が起  
こっていた。

亀甲や獣骨に刻まれた謎の古代文  
字「甲骨文字」の発見である。



亀甲に刻まれた甲骨文字



CCTV 高清

故宮至寶 1

資料映像：NHKスペシャル「故宮」より

王懿榮（一八四五～一九〇〇）

甲骨文字を発見したのは、清末の文人官僚・王懿榮であった。

金石学（古代文字学）の学者でもあった彼は、一八九九年、マラリア治療のために購入した薬材に未知の古代文字が刻まれているのを発見した。彼はこれを「殷商の故物」と考へ、甲骨資料千余片を収集した。



王懿榮（1845～1900）

王懿榮（一八四五～一九〇〇）

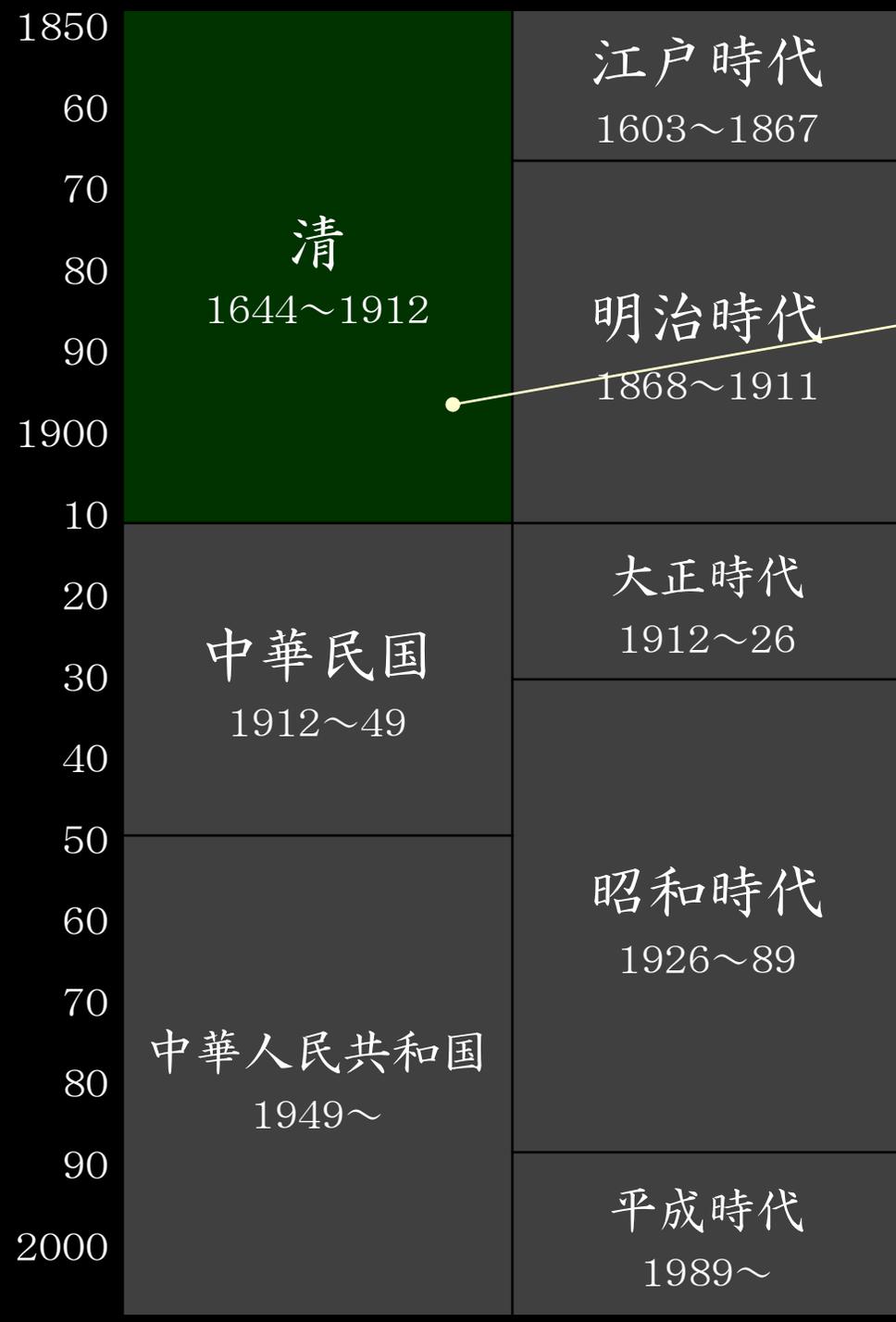
甲骨文字を発見したのは、清末の文人官僚・王懿榮であった。

金石学（古代文字学）の学者でもあった彼は、一八九九年、マラリア治療のために購入した薬材に未知の古代文字が刻まれていたのを発見した。彼はこれを「殷商の故物」と考え、甲骨資料千余片を蒐集した。



王懿榮が、マラリア治療のために購入した薬材に未知の古代文字が刻まれていたのを発見した。彼はこれを「殷商の故物」と考え、甲骨資料千余片を蒐集した。

王懿榮（1845～1900）



王懿荣、甲骨文字を発見 (1899年)

義和団事件(1900)



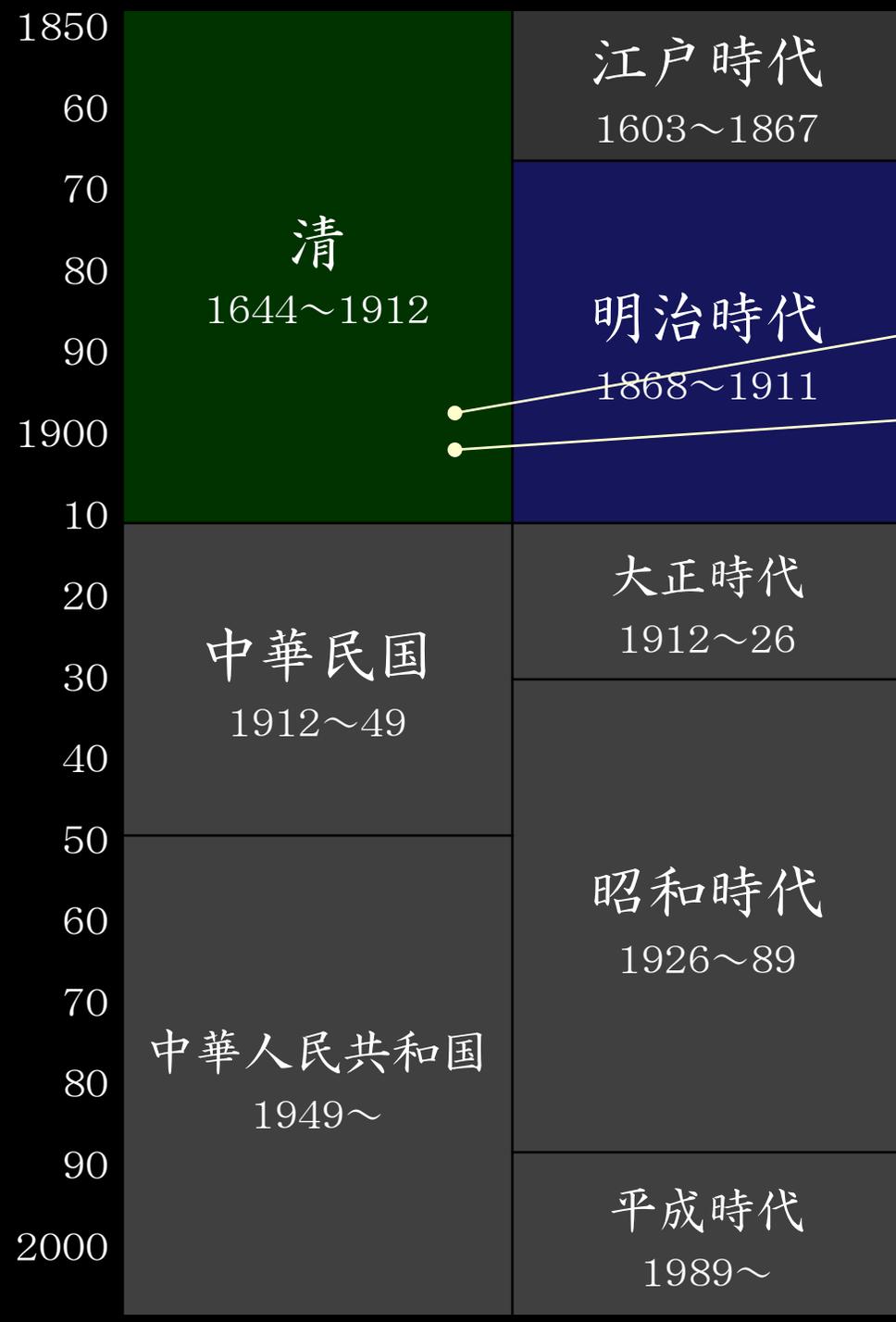
紫禁城（現在の故宮）の中を行軍する八カ国連合軍（1900）

王懿榮（一八四五～一九〇〇）

翌一九〇〇年、義和団事件が起こると、王懿榮は弁理京城団練大臣として首都北京の防衛を命じられた。しかし、北京が八カ国連合軍（イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス、ロシア、日本、イタリア、オーストリア）に占領されると、自宅の壁に「主憂うれば臣辱じ、主辱しめらるれば臣死す」という辞世の句を残し、井戸に身を投げて自害した。



王懿榮（1845～1900）



王懿榮、甲骨文字を発見 (1899年)

劉鶚、鉄雲蔵亀を出版 (1903年)



劉鶚 (1857~1909)

## 劉鶚 (一八五七〜一九〇九)

王懿榮が果たすことのできなかった甲骨資料の研究は、その幕客（私設秘書）であった劉鶚が受け継いだ。

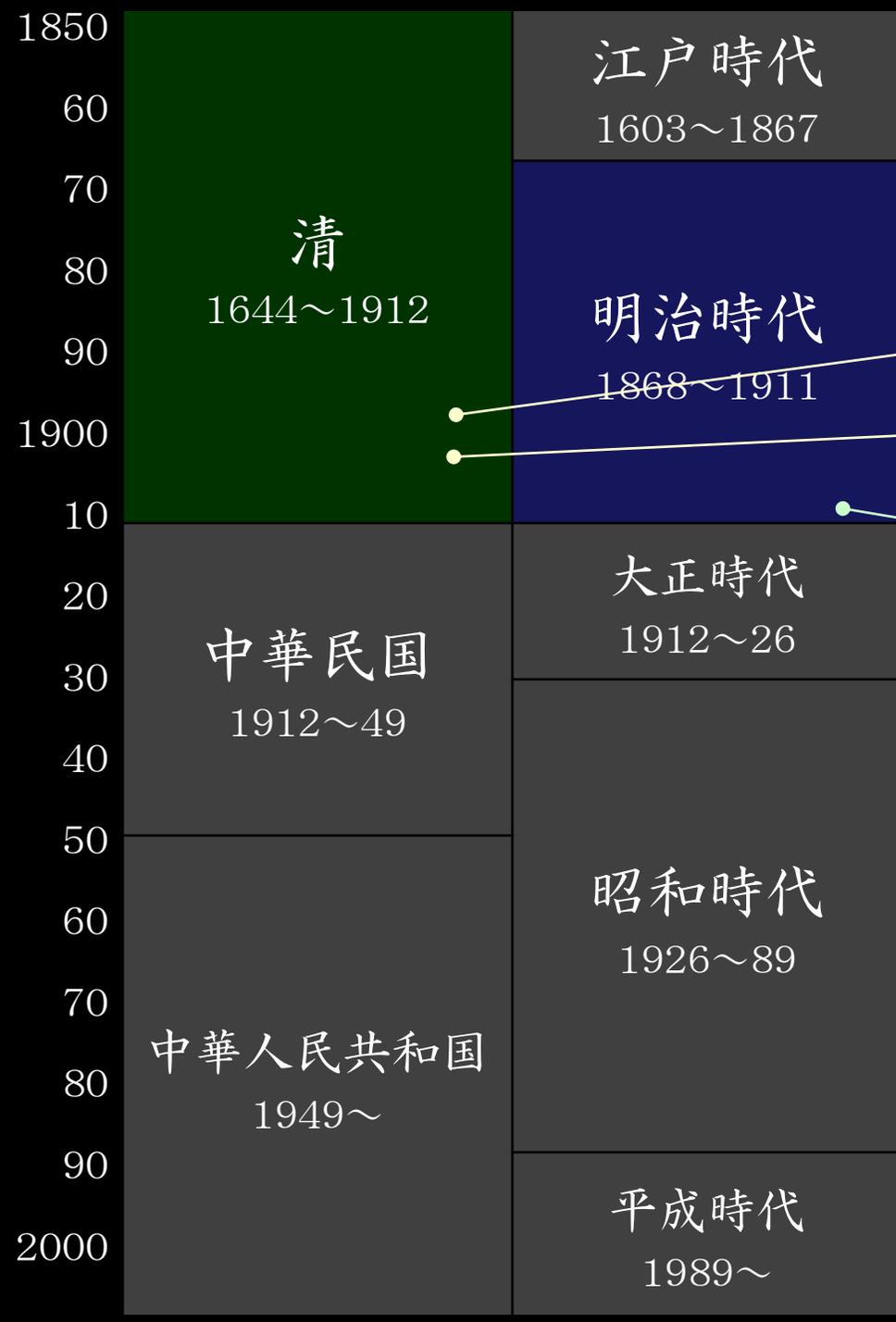
王懿榮の死後、甲骨資料を譲り受けた劉鶚は、これに加えて計五千片あまりの甲骨資料を収集し、一九〇三年に『鉄雲蔵龜』を刊行した。

『鉄雲蔵亀』（一九〇三年刊）

王懿榮が非業の死を遂げた後、甲骨資料を買い取った劉鶚は、自身が集めたものも含め、約五千点の資料の中から文字が鮮明なもの一〇五八片を選び、一九〇三年に拓本集『鉄雲蔵亀』を刊行した。

甲骨文字はこうしてはじめて世に広く知られることになった。





- 王懿榮、甲骨文字を発見 (1899年)
- 劉鶚、鉄雲蔵亀を出版 (1903年)
- 林泰輔、甲骨文字に関する論文を発表 (1909年)



林泰輔 (1854~1922)

## 甲骨資料の紹介

劉鶚の『鉄雲蔵亀』にいち早く注目したのが林泰輔であった。

林は一九〇九年(明治四二年)、『史学雑誌』に「清国河南省湯陰県発見の亀甲牛骨に就きて」を發表し、当時真偽が疑われていた『鉄雲蔵亀』を精査考証して、甲骨資料が中国古代史を研究する上で貴重な物証であることを指摘した。



劉鶚 (1857~1909)

## 劉鶚 (一八五七〜一九〇九)

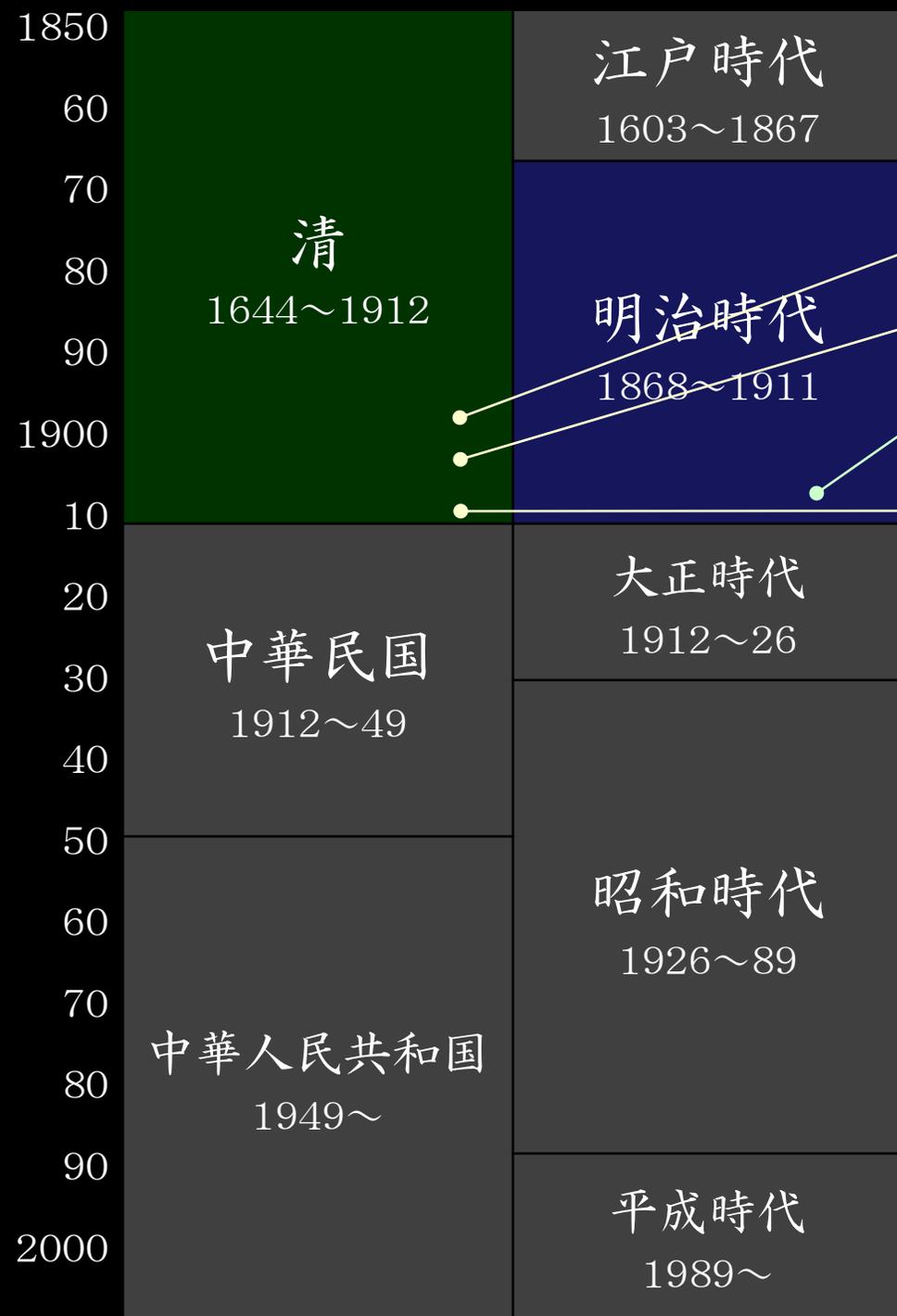
王懿榮を始めとして、甲骨資料に関わった人には不幸な死を遂げた人が多い。劉鶚は義和団事件の際、北京の難民救済のため、八カ国連合軍と交渉して太倉の政府米を難民に与えたのが政府米の私売に当たるとして、一九〇八年（光緒三四年）に两江総督の弾劾を受け、新疆ウルムチに流刑となり、翌年、病死した。



羅振玉 (1866~1940)

### 羅振玉 (一八六六〜一九四〇)

劉鶚に甲骨資料の出版を勧めたのは羅振玉だった。同書が日本で高い評価を受けると、一九〇九年、彼は自ら現地に赴き、真の出土地が河南省安陽県小屯村であることをつきとめ、さらに甲骨資料の中に史記殷本紀と一致する王名十五と史記を訂正すべき王名二を発見した。



- 王懿荣、甲骨文字を発見 (1899年)
- 劉鶚、鉄雲蔵亀を出版 (1903年)
- 林泰輔、甲骨文字に関する論文を発表 (1909年)
- 羅振玉、真の出土地を発見 (1910年)



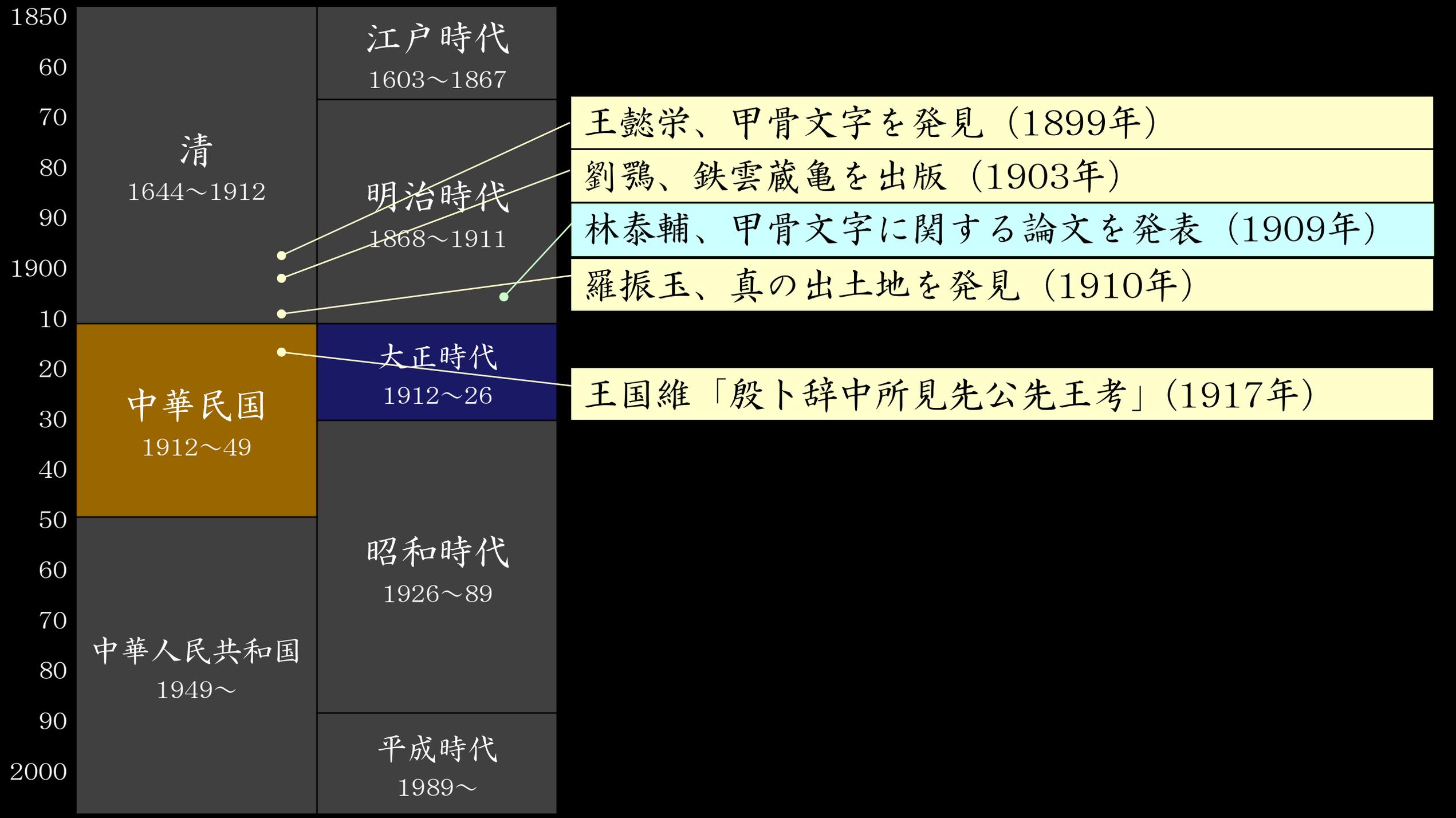


NHK 4K 超高清

1968

故宮至宝 1

資料映像：NHKスペシャル「故宮」より



江戸時代

1603~1867

清

1644~1912

明治時代

1868~1911

王懿榮、甲骨文字を発見 (1899年)

劉鶚、鉄雲蔵亀を出版 (1903年)

林泰輔、甲骨文字に関する論文を発表 (1909年)

羅振玉、真の出土地を発見 (1910年)

大正時代

1912~26

中華民国

1912~49

王国維「殷卜辞中所見先公先王考」(1917年)

昭和時代

1926~89

中華人民共和国

1949~

平成時代

1989~

王国維（一八七七一―一九二七）

羅振玉を助けて甲骨資料の整理と研究に従事したのが、羅の学生であり、娘婿でもあった王国維だった。

王は甲骨文字に刻まれた王の名が、史記殷本紀などに見える殷王朝の系図と一致することを明らかにし、それが殷王朝の謎を解き明かす第一級の史料であることを証明した。



王国維（1877-1927）

# 殷墟文字丙編247

(前辭)甲申の日、占いをを行った(占い師の)殻が聞いた

(命辭)婦好の出産は吉でしょうか？

(占辭)王は占って言った。  
「丁の日に生まれれば大吉、庚の日に生まれれば吉だ」

(驗辭)三十一日後の甲寅の日に出産、女子が生まれた



命辭 Charge  
前辭 Preface



## 正問之例

甲申這天占卜，殼問說：婦好要分娩了，好嗎？  
王根據卜兆預言說：如果是在丁日分娩，很好；如果是在庚日分娩，吉利。  
經過三十又一天，婦好在甲寅日分娩，不好，生了女生。

辭例完整之甲骨

(殷墟文字丙編247，現藏於中央研究院歷史語言研究所)

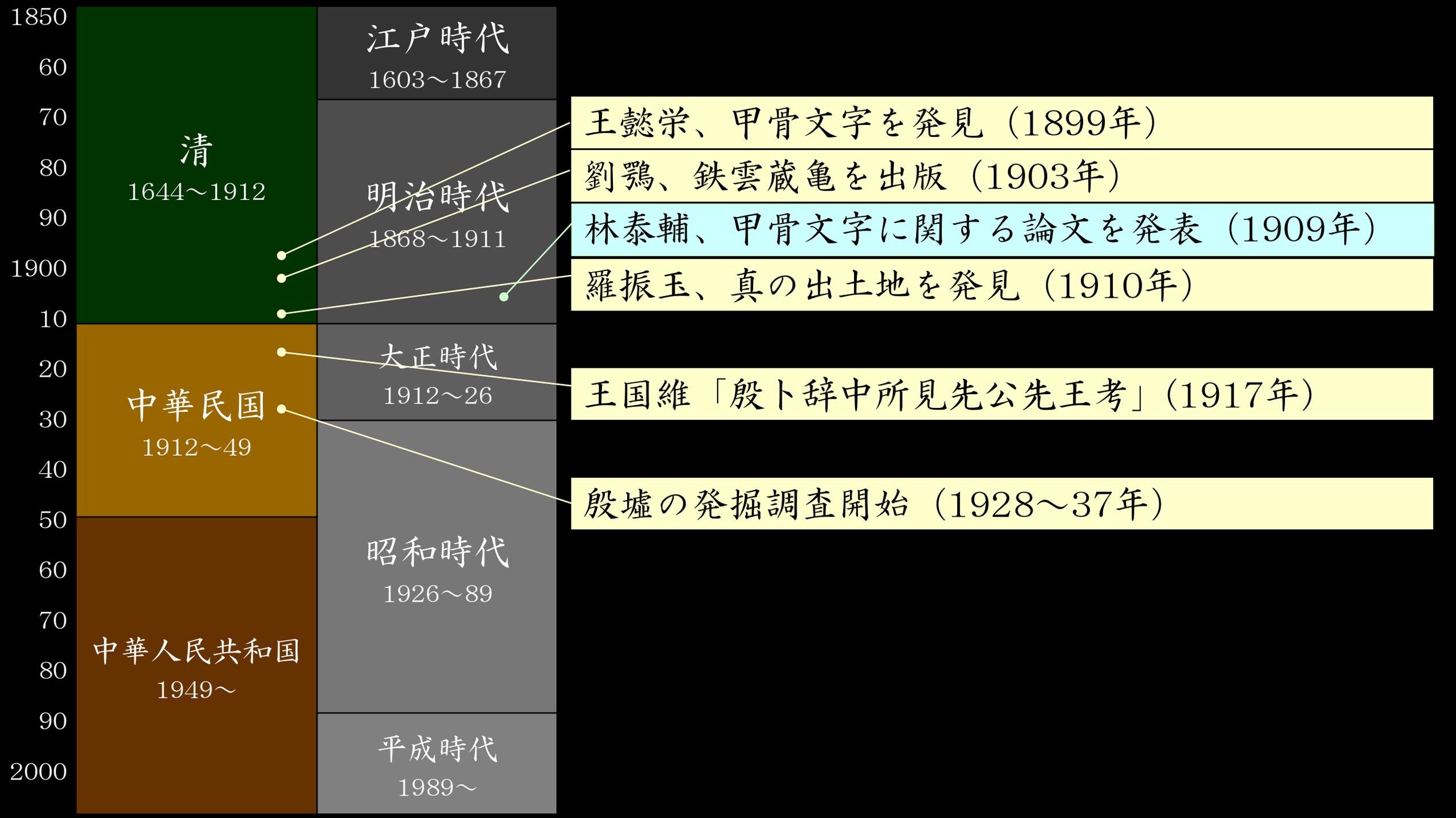


甲骨資料の真の出土地が明らかになり  
さらにその解読によって殷王朝の存在が  
証明されると、中国はある国家事業を  
開始した。その国家事業とは？

## 第三節

# 殷墟の発掘

現代によみがえった殷王朝



江戸時代

1603~1867

清

1644~1912

明治時代

1868~1911

王懿栄、甲骨文字を発見 (1899年)

劉鶚、鉄雲蔵亀を出版 (1903年)

林泰輔、甲骨文字に関する論文を発表 (1909年)

羅振玉、真の出土地を発見 (1910年)

大正時代

1912~26

中華民国

1912~49

王国維「殷卜辞中所見先公先王考」(1917年)

殷墟の発掘調査開始 (1928~37年)

昭和時代

1926~89

中華人民共和国

1949~

平成時代

1989~

1850

60

70

80

90

1900

10

20

30

40

50

60

70

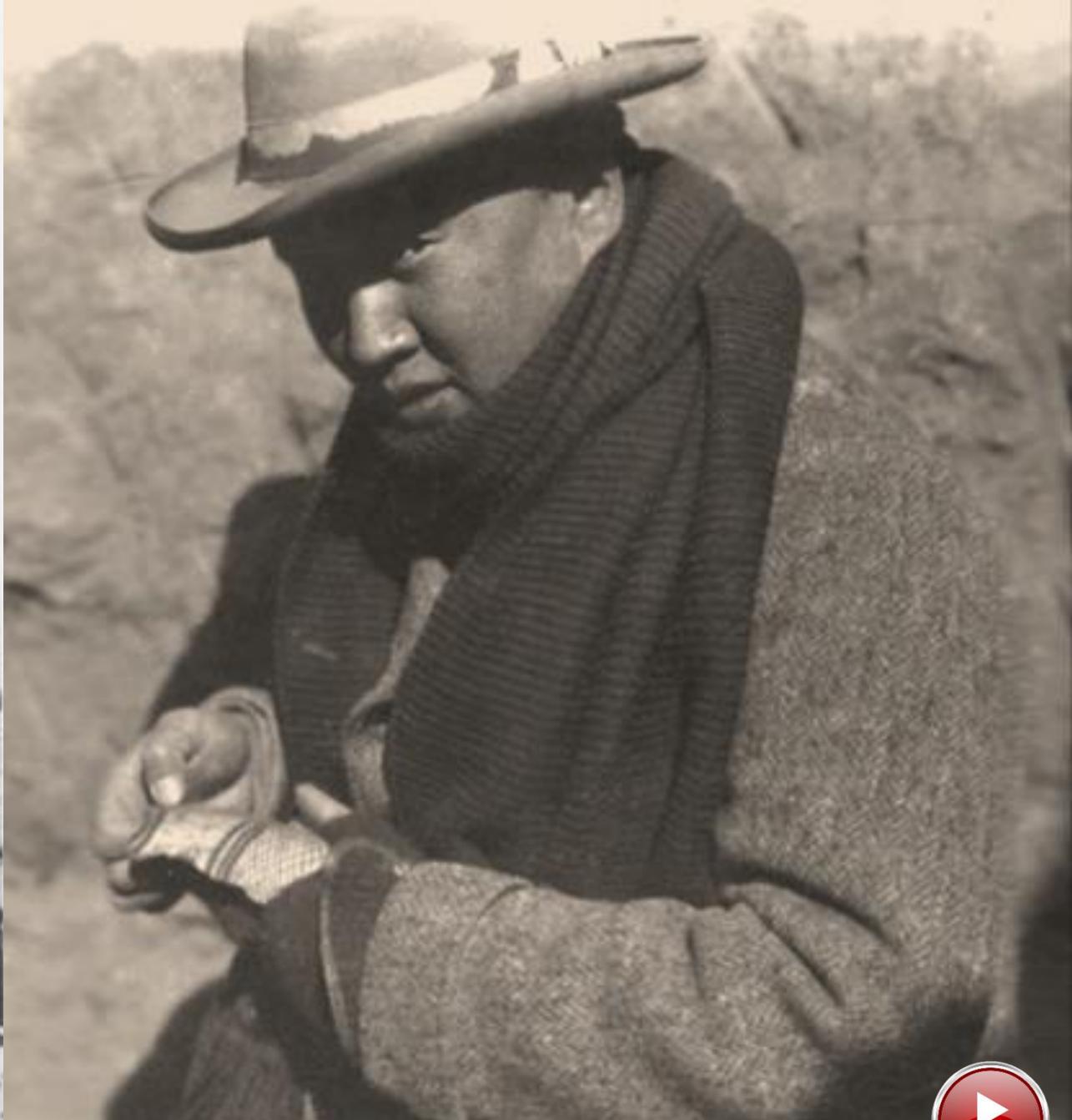
80

90

2000



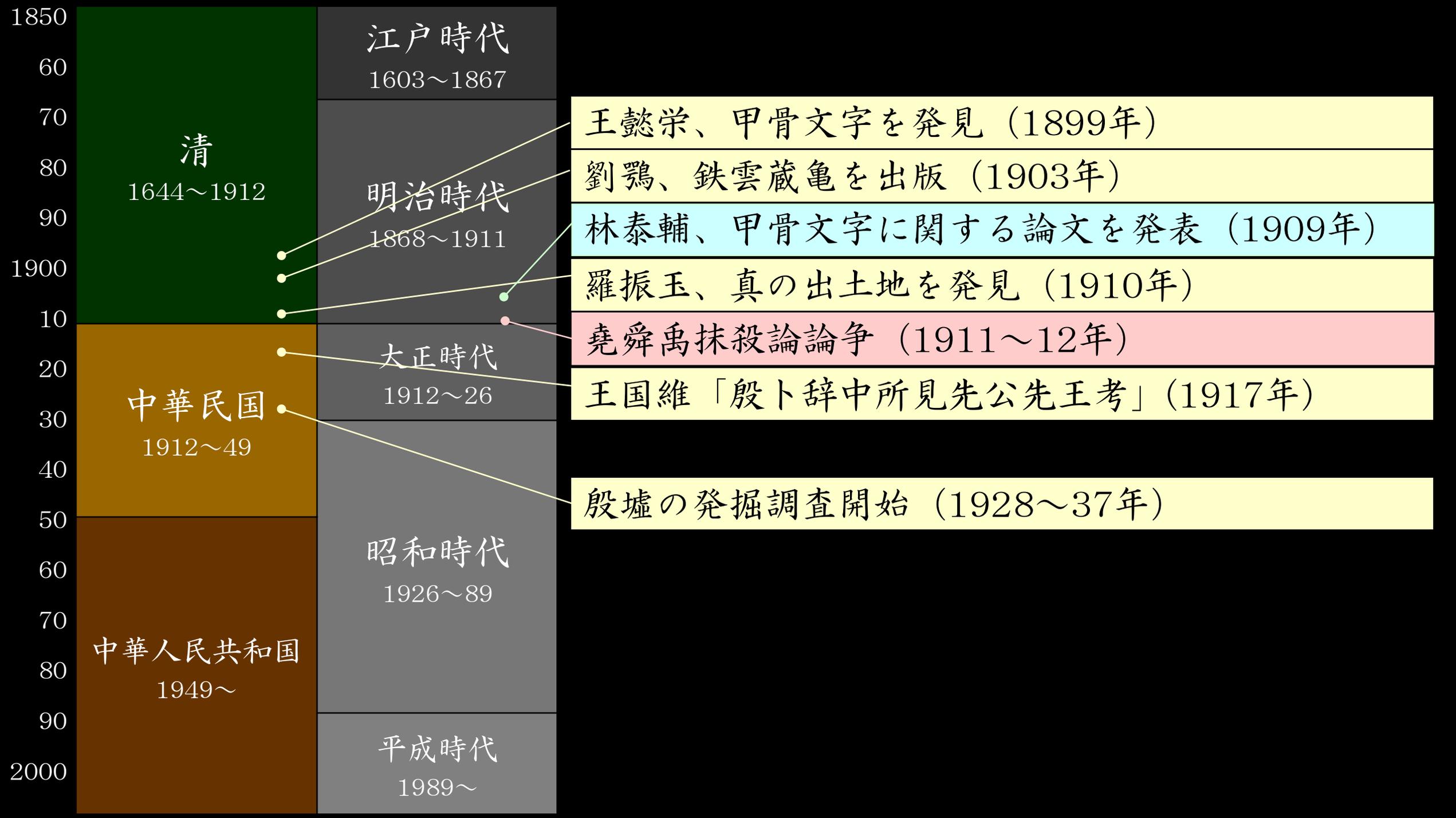
董作賓 (1895~1963)



李濟 (1896~1979)





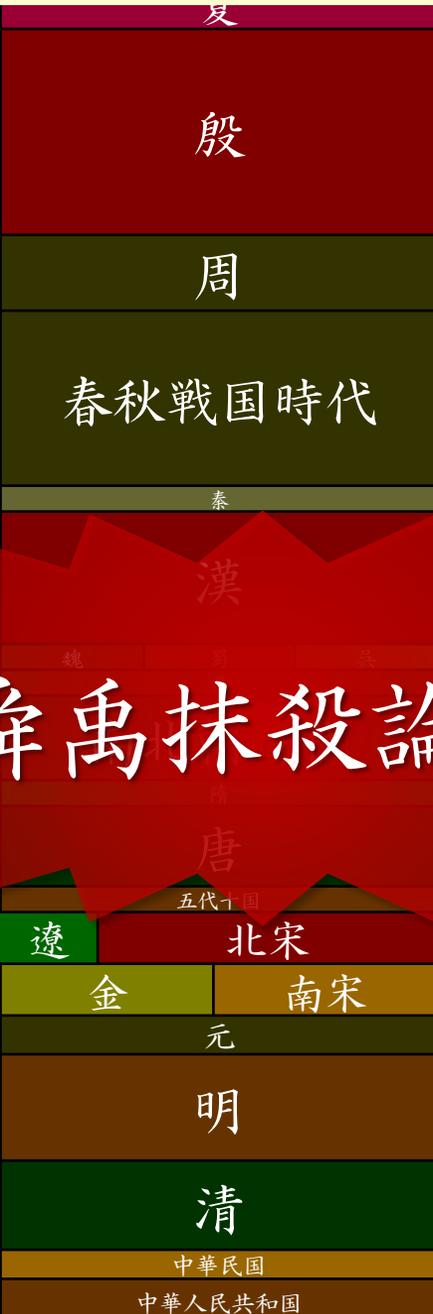


甲骨文字の発見と研究により殷王朝の存在が証明される



白鳥庫吉 (1865~1942)

B.C.1600  
1500  
1400  
1300  
1200  
1100  
1000  
900  
800  
700  
600  
500  
400  
300  
200  
100  
A.D. 0  
100  
200  
300  
400  
500  
600  
700  
800  
900  
1000  
1100  
1200  
1300  
1400  
1500  
1600  
1700  
1800  
1900  
2000

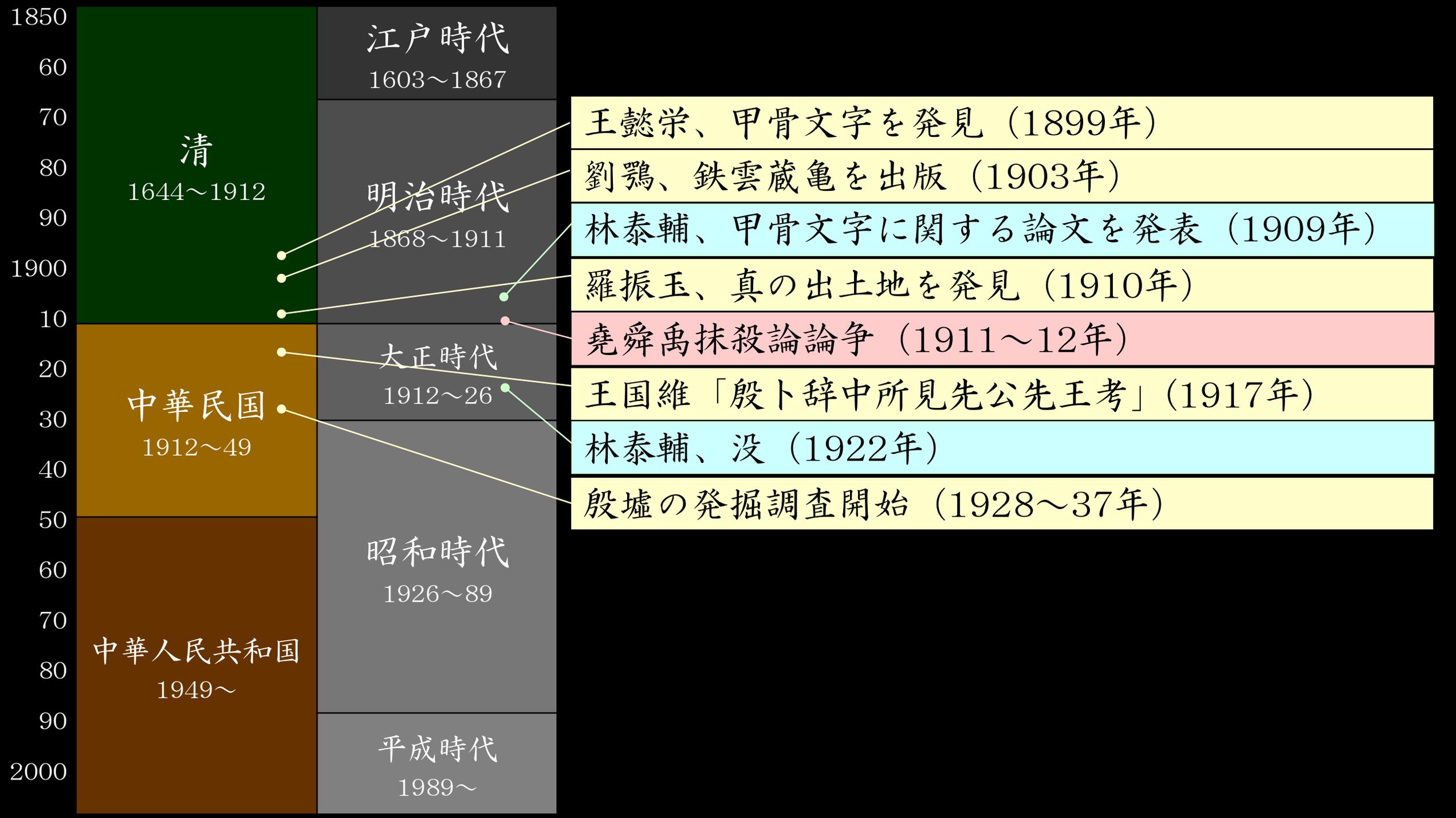


林泰輔 (1854~1922)

堯舜禹抹殺論論争



林泰輔は発掘された殷墟を  
見ることができたのか？





林泰輔 (1854~1922)

## 実現しなかった夢

林泰輔は一九一八年の河南省安陽市での第一次調査の後、二一年に再度調査の準備を進めていたが、一九二一年に起こった五四運動の後、日中関係が悪化したため、調査は実施できず、二二年にこの世を去った。

二十世紀最大の発見といわれる殷墟の発掘の六年前のことであった。



林泰輔 (1854~1922)

林泰輔が後学の徒に残した言葉

林泰輔は最後の論文「支那上代の研究資料について」の中で、学問のあり方についてこう述べている。



林泰輔 (1854~1922)

林泰輔が後学の徒に残した言葉

支那上代の文籍と（甲骨資料など）他の資料とを比較対照して之を討究せば、種々の事柄に於てその一致せしものを見出すことは決して難事に非ざるなり。元来、何等の關係なく別々に各方面に伝りしもの、かくまで一致することは、即ち当時の真相を伝ふるものにて、実に確乎たる憑拠を数千歳の後に遺したるものといふべし。

林泰輔 「支那上代の研究資料について」



林泰輔 (1854~1922)

林泰輔が後学の徒に残した言葉

古代の文籍豈悉く後世の偽託ならんや。世の論者宜しく眼界を闊大にし、文籍に就ては表裏両面より精密なる観察をなし、又博く資料を文籍以外に求め、参伍錯綜して之を考覈（こうかく）すべし。徒に空想的仮説に耽りて快を一時に取ることは、たとひ其の説巧妙なりとするも決して後世の識者を欺くことは能はざるなり。



林泰輔 (1854~1922)

「**眞実のみが勝利する**」\*

「脱亜入欧」が唱えられ、アジア蔑視の風潮が広まる中、林泰輔は中国の古典籍を信じ、中国の研究者が新たに発見し、研究を進めていた甲骨資料を物証として、**眞実**——殷王朝の**実在**——を明らかにし、白鳥庫吉との論争に勝利した。

\* 古代印度哲学の言葉。英国の植民地支配を脱したインドがいまも掲げる標語

# 世界文化遺産に登録された殷墟



殷墟は2006年、世界文化遺産に登録され、いまでも広大な遺跡として保存されている

## まとめ

- 甲骨文字の発見と解読により、中国文明圏の文字である漢字は、殷王朝が現在の河南省安陽県に都を移した約3300年ほど前にすでに誕生していたことが明らかとなった。
- 甲骨資料に刻まれた文字は、現在知られているだけで約4500種類ほどあり、その半数の2000字ほどが解読されている。
- 羅振玉、王国維らによる甲骨資料の整理・研究と、それに続く殷墟の発掘により、殷王朝の实在が確認された。

## 参考文献

- 平川祐弘『マテオ・リッチ伝1』（東洋文庫一四一、平凡社、一九六九年）
- 陳舜臣『中国発掘物語』（講談社文庫 1991）
- 阿辻哲次『図説漢字の歴史』（大修館書店 1989）
- 江上波夫編『東洋学の系譜』（大修館書店 1992年、林泰輔と白鳥庫吉の評伝を収める）